

Whitman とBlack の肉体観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹島, 泰 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37417

Whitman と Blake の肉体観

竹 島 泰

Walt Whitman (1819-92) が代表作 *Leaves of Grass* の初版を上梓したのは、1855年の7月であった。かれ自ら活字を選別し、植字や印刷に参加し、装訂をこらし、非常な意気込みと自信をもって世に問うたのであるが、Emerson など少数の理解者を除き世評は極めて悪く、Whitman 自身の言葉によれば“至るところで憤怒と非難を捲きおこした”のであった。New York の Putnam's Monthly や The Criterion などジャーナリズムはこぞって攻撃の鋒先を向け、Boston の Christian Examiner 誌は“impious libidinousness”ときめつけた。また本書の寄贈をうけた当代の一流詩人 Whittier は、怒ってそれを火中に投じたと伝えられている。これらの攻撃や悪評の原因が、Whitman が肉体や性の問題を余りにも大胆露骨にとり上げたことにあったのは疑いが無い。ピューリタニズムやヴィクトリア朝の道德観の影響下であり、euphemism を尊重し、woman, stomach, pantaloons などのような当り前の言葉さえ露骨であるとして忌避し、leg といえばたとえピアノの leg でも顔を赤らめた当時の上品ぶった人々にとって、次のような憶面もない性的描写や露骨な肉体的描写が、どれほど大きな衝撃であったか推察するに余りあるものがある。

The coats and caps thrown down, the embrace of love and resistance,
The upper-hold and under-hold, the hair rumbled over and blinding
the eyes.

- I Sing the Body Electric, ll. 26-27.

Hips, hip-socket, hip-strength, inward and outward round, man-balls,
man-root

-Ibid., l. 143.

Ebb stung by the flow and flow stung by the ebb, love-flesh swelling
and deliciously aching,

Limitless limpid jets of love hot and enormous, quivering jelly of love,

white-blow and delirious juice.

-Ibid., II. 59-60.

このような訳で初版の売れ行きは極めて悪く、2ドルの定価を1ドルに下げたが事態は少しも改善されなかった。失意の底から新たな決意をもって立ち上り、第2版を世に問うたのは翌年の1856年であった。初版が12の詩を含んでいたのに対し、これは32の詩を含み、凡そ干部を刊行したといわれるが、初版同様売れ行きは香しくなかった。以前にもまして高まる悪評に耐えかね、出版本の Fowler & Wells は遂に出版も取次ぎも拒否し、この詩集は中絶の形となった。然し Whitman の自信と決意は固く、翌年の1857年に彼はノートに次のように書きしるしている。

The Great Construction of the New Bible. Not to be diverted from
the principal object—the main life—the three hundred and sixty-five.

—It ought to be ready in 1859.

この決意は1860年5月第3版となって結実した。この版に収められた詩は総計157の多きに及び、第2版と較べると125の新詩が加えられたことになる。これらの中には、彼の思想を知る上に重要な、性愛を歌った *Enfants d'Adam* や、友愛を扱った *Calamus* の一群の詩が見出される。第4版が出たのは、それから7年後の1867年であった。この版において始めて詩の配列が定められ、夫々異った群に分類され、新たな77の詩も一つの体系の中に組み入れられることになった。

さて、第4版が出た当時 Whitman の名前と作品は、英国の Rossetti 兄弟およびその仲間達に既に知られていた。D. G. Rossetti はそれ程注目しなかったが、弟の W. M. Rossetti は Whitman に傾倒し、その諒解を得て極端な詩を除き、1868年第四版にもとずいて *Poems of Walt Whitman* を編さん刊行し、かなりな成功をおさめた。*The Life of William Blake* の著者 Alexander Gilchrist の妻で、夫の死後その未完の大著を完成した Anne Gilchrist が、Rossetti 編さんのこの詩集およびその原本を見て Whitman に魅了せられ、その心酔者となったことは良く知られている。かねて Whitman に注目していた C. A. Swinburne が、優れた Blake 論 *William Blake* を出版したのも同年の1868年であったが、その中で彼は Blake と Whitman の類似性を認め次のように述べている。

I can remember one poet only whose work seems to me the same or similar in kind; a poet as vast in aim, as daring in detail, as unlike others, as coherent to himself, as strange without and as sane within. The points of contact and sides of likeness between William Blake and Walt Whitman are so many and so grave, as to afford some ground of reason to those who preach the transition of souls or transfusion of spirits. The great American is not a more passionate preacher of sexual or political freedom than the English artist.....

Ann Gilchrist の好意に満ちた批評 *A Woman's Estimate of Walt Whitman* が、Boston の *The Radical* 誌に発表されたのは1870年であったが、露骨な性的、肉体的描写の故に特に女性によって忌み嫌われていた Whitman に対し、教養ある淑女 Anne が深い理解と共鳴を示したことには、Swinburne の場合と同じく、彼女が Blake に通暁していたことがその根本的理由としてあったと考えられる。

確かに Blake の絵画には、例えば全裸の若者を描いた“Glad Day”や、数組の裸体の男女が相擁している様の描かれている *The Marriage of Heaven and Hell* の扉の絵のように、裸体美や性感に溢れているものが多い。

また、

Abstinence sows sand all over
The ruddy limbs & flaming hair,
But Desire Gratified
Plants fruits of life & beauty there.

- Rossetti Ms.

What is it men in women do require?
The lineaments of Gratified Desire.

What is it women do in men require?
The lineaments of Gratified Desire.

- Ibid.

といったような性感に満ちた詩や、あるいはまた *Proverbs of Hell* の

The nakedness of woman is the work of God.

The head sublime, the heart Pathos, the genitals Beauty, the hands
& feet Proportion.

などの箴言を知っていた Anne にとって、露骨な Whitman の性的、肉体的描写も、さほど抵抗感なく受け入れることが可能であったであろう。

以上見てきたように、Whitman と Blake の肉体観には確かに一見類似したところがある。然しながら Swinburne 以来大した批判もなく受け入れられて来たように、それらは果して本質的に同一のものであったであろうか。この点について究明することは、両詩人を理解する上において、極めて重要な事柄の一つであると信ずる。

Whitman 自身が Blake からどの程度の影響を受けていたか詳かではないが、Robert Blair (1699-1746) の詩 *The Grave* のために Blake が描いた挿絵の一枚 “The Door of Death” ——まさに墓に入ろうとしている杖をもった一人の老人と、墓の上で空を見上げる光明に輝く全裸の若者が描かれている——の構図を Whitman が非常に愛し、自らの墓をそれに基いて design した事実を想起するならば、Blake からある程度の影響をうけたであろうことは推測するに難くない。然しながら少くとも肉体観においては、Blake のそれが Whitman の思想を支持あるいは強めるのに与ったことはあるにせよ、根本的、本質的な影響を及ぼしたとは考えられない。というのは Whitman は生来極めて肉感的であり、他人の体に触れることも、あるいは自己が他人に触れられることも “堪えられぬ程の欲び” であり、裸体になることを何にもまして好んだからである。

I merely stir, press, feel with my fingers, and am happy,
To touch my person to some one else's is about as much as I can
stand.

—Song of Myself, ll. 617-618.

I will go to the bank by the wood and become undisguised and naked.
I am mad for it (i.e. the atmosphere) to be in contact with me.

—Ibid., ll. 19-20.

Whitman の肉体に対する関心は、異常ないし偏執的といってもよい程のものであった。*Children of Adam* の中の “I Sing the Body Electric” のとき、その端的な発露であるといっても差支えないであろう。しかも彼にとって、肉体 “そのもの” が、あらゆる生理現象や本能的欲望をも含んで聖なるものであり、靈魂そのものですらあった。

The man's body is sacred and the woman's body is sacred,
No matter who it was, it is sacred.

—I Sing the Body Electric, ll. 84-85.

O I say these (i.e., head, neck, ear, shoulder, bowels, man-root,
womb, etc.) are not the parts and poems of the body only, but of
the soul,

O I say now these are the soul !

—Ibid., ll. 163-164.

従って性欲や性交も、Whitman にとってはなんら隠蔽すべき、あるいは恥すべきものではなく、新たな肉体を産み出す聖なる衝動であり、甘美にして聖なる営みであった。

I do not press my fingers across my mouth,
I keep as delicate around the bowels as around the head and heart,
Copulation is no more rank to me than death is.
I believe in the flesh and the appetites,
Seeing, hearing, feeling, are miracles, and each part and tag of me
is a miracle.
Divine am I inside and out, and I make holy whatever I touch or am
touch'd from,

—Song of Myself, ll. 519-524.

Without shame the man I like knows and avows the deliciousness
of his sex,
Without shame the woman I like knows and avows hers.

—A Woman Waits for Me, ll. 9-10.

従って女性は男性の単なる性的対象ではなく、靈魂と生物学的な肉体の門戸である。

You (i. e. woman) are the gates of the body, and you are the gates
of the soul.

-I Sing the Body Electric, l. 67.

Whitman は一種の進化論的輪廻思想の信奉者^りで、性的関係を通して靈魂は肉体界を輪廻し、物質的世界と接触し、自我表出が行われてゆく。それ故性こそは魂と物質界とを結合し、靈的進歩を可能にする最も根源的なものであり、それなくしてすべては空無であった。

all were lacking if sex were lacking, or if the moisture of the right
man were lacking.

-A Woman Waits for Me, l. 2.

このように性を通して靈魂は肉体界を輪廻するが故に、死も彼にとって死滅ではなく、却って生を促進するものであり、新たな生への門出であった。彼は次のように歌っている。

I wish I could translate the hints about the dead young men and
women,

And hints about old men and mothers, and the offspring taken soon
out of their laps.

What do you think has become of the young and old men ?

And what do you think has become of the women and children ?

They are alive and well somewhere,

The smallest sprout shows there is really no death,

And if ever there was it led forward life, and does not wait at the
end to arrest it,

And ceas'd the moment life appear'd.

All goes onward and onward, nothing collapses,

And to die is different from what any one supposed, and luckier.

-Song of Myself, ll. 121-130.

以上 Whitman の肉体観について概観してきたのであるが、それでは Blake の肉体観はどのようなものであったであろうか。Blake も Whitman 同様肉体と性の讚美者であると一般に見做されている。しかし Blake の作品を注意深く調べてゆくなれば、彼は決していわゆる肉体や性の讚美者ではなく、寧ろそれらの激しい否定者であったことが判明するであろう。Blake の12才から21才に至る間の作品を集めたと云われる *Poetical Sketches* の “Contemplation” の中で、Blake は次のようなことを述べている。

Heavenly goddess! I am wrapped in mortality, my flesh is a prison,
my bones the bars of death; Misery builds over our cottage roofs, and
Discontent runs like a brook. Even in childhood Sorrow slept with
me in my cradle.

肉体は靈魂を閉塞する牢獄であり、その死をもたらすものであるというこの考えは、Blake の生涯を通じ、全作品を貫いて変わらず終始一貫しているのである。素朴可憐な童謡詩集（実際にはその背後に神秘的な世界が秘められているのであるが）*Songs of Innocence* (1789) の中に含まれている “The Chimney Sweeper” の第3節でも、“thousands of sweepers, Dick, Joe, Ned, and Jack,/Were all of them lock'd up in coffins of black.” と、肉体を “coffin” という語で象徴し、肉体内に閉じこめられた靈魂が “死” の状態にあることを暗示している。同年に出された *The Book of Thel* も、永劫界 Innocence に住する魂 Thel が、天界の北の門を通して肉体界に下降し、雪と氷と嵐と夜の支配する荒涼たる現身の世の悲惨な光景におどろいて、天界に逃げ帰ることがその結びとなっている。

このように肉体的世界は、Blake にとってあくまでも悲しみと我執迷妄に満ちた、暗澹たる “夜” と “冬” の世界であった。このような肉体的世界を正面から取り上げたのが、*Songs of Innocence* と対をなす *Songs of Experience* (1794) である。その中に、肉体を生み出す母 Tirza に寄せた次のような詩が見出される。

Whate'er is born of mortal birth
Must be consuméd with the earth,
To rise from generation free:
Then what have I to do with thee?

.....

Thou, Mother of my mortal part,
With cruelty didst mould my heart,
And with false self-deceiving tears
Didst bind my nostrils, eyes, and ears;

Didst close my tongue in senseless clay,
And me to mortal life betray:
The death of Jesus set me free:
Then what have I to do with thee?

-To Tirzah, stanzas 1,3,4.

「約百記」第25章にも「神の光明なものをお照らさざらん。然ば誰か神の前に正義ただしかるべき、婦女の産し者いかでか清かるべき。祝よ月も輝かず、星もその目には清明きよらかならず。いわんや蛆のごとき人、虫のごとき人の子をや。」とあるが、肉体的生命 (mortal life) の世界は、Blake にとって飽くまでも迷妄と煩惱に満ちた穢土 (dirty world) であった。肉体的なもの一切を焼尽し、肉世界より完全に脱却することが、Blake の生涯を通して彼の所謂 “Great Task” であったのである。それ故このような肉體観は、彼の晩年の作品においても少しも変ることがない。

Imagination, the real & eternal World of which this Vegetable Universe is but a faint shadow, & in which we shall live in our Eternal or Imaginative Bodies, when these Vegetable Mortal Bodies are no more.

-Jerusalem, To the Christians

A Vegetated Christ & a Virgin Eve are the Hermaphroditic
Blasphemy: by his Maternal Birth he is that Evil-One,
And his Maternal Humanity must be put off Eternally,
Lest the Sexual Generation swallow up Regeneration.
Come Lord Jesus, take on thee the Satanic Body of Holiness!

-Jerusalem, 90.

以上考察してきたことから明かなように、Blake の肉体観は Whitman のそれと似ているところか、寧ろ正反対であると云った方がよい。それでは何故両者は、共に肉体讃美者として同一範疇に入れられてきたのであろうか。その最大の原因は、Blake の作品の皮相的な解釈ないし受け取り方にあったと思う。山宮允氏が「想像的作家の数ある中に Blake 程多分に幻覚の賦質を享け、靈感に充ち満ちていたものはない。彼は洵に生れながらの神秘主義者、熾なる靈感の陶醉に一生を委ねた奇特異風な作家であった。かくて彼は、初めて神の幻像を自家の窓に見たという幼弱の頃から、天国の歌をうたって死の到来を迎えた臨終の際に至るまで、常に「想像の世界」(world of imagination) に棲み、屢々奇異なる幻像をば靈感を以て詩画に表現したのであった。そうして彼の職とした彫版印刷が彼に糊口の資をもたらず、屢々彼を極度の窮乏に陥れたのも、又彼が永い間世人に理解されず、少数の知己以外の者には狂人の如く視なされていたのも、皆彼の異常な幻覚乃至靈感のためであった。……洵に Blake の幻覚は異常なものであった。彼は靈感の刹那に、恰も実在する物体を見るが如く明確に、種々の幻像を実際見たのであった。この幻覚の強さ乃至明確さに於て Blake を凌駕する作家はない。」²⁾と述べているように、Blake の絵画や詩は神秘的な vision に満ち満ちている。彼の絵の殆んどすべては、現象界のそれではなく、彼の心眼に映じたこの世のものならぬものである。Blake は好んで裸体を描いているが、われわれはそれらを現実の肉体であると速断してはならない。毘沙門天の五太子の一人である那吒太子は、自己の体の骨を折いてこれを父に還し、肉を折いて母に還し、然る後己の本来身を露わして父母のために説法したと伝えられている。人間の体は骨と肉とで構成されているのであるから、それらを父母に還してしまえば、勿論肉体は無に帰する。それではこの本来身とは一体何であろうか。無論それは肉眼で見ることの出来るものではない。Blake の所謂 “Inward Eye” を持てる者にのみ映ずる神秘極まりない Vision である。Blake はこの本来身を “Spiritual Body” と称し、那吒太子の場合と同じく、肉体が切り折かれ、分離されることによって顕現するのである。

He (i.e. Christ) stood in fair Jerusalem to wake up into Eden
The fallen Man; but first to Give his vegetated body
To be *cut off & separated*, that the Spiritual body may be Reveal'd.

- *Vala*, Night VIII, 255-257.

前掲の詩 “To Tirza” の挿絵にも、地上に倒れた裸体の男子と、それを支え起そうとしている二人の女性——Blake のいわゆる Daughters of Beulah で、霊的覚醒に参与する神秘的な力の vision である——と一人の老人が描かれ、老人の衣に “It is Raised a Spiritual Body” と書かれている。Whitman が大変好んでいた “The Door of Death” の墓の上の光明に輝く全裸の若者の姿も、あるいは “Glad Day” の欣喜と生命に溢れ、男根も露わな裸体の若人の姿も、実は現実のそれではなく、この Spiritual Body の vision なのである。Proverbs of Hell の “The head Sublime, the heart Pathos, the genitals Beauty, the hands & feet Proportion.” は、今その詳細について述べる余裕はないが、この Spiritual Body の各部を讚美したものに他ならない。Songs of Innocence の中に見出される不思議な詩 “The Blossom” と “Infant Joy” の挿絵には、それぞれ男根と子宮が非常に美しい “花” として描かれているが (cf. the genitals Beauty), これらは Innocence (Imagination) の世界の永劫の生命 (Energy, Life) と、“Self-annihilation” によって肉体界を脱却した靈魂の永劫界への誕生を象徴しているのである。Blake は “To the Queen” の中で次のように歌っている。

The Grave (i.e. the death of body; self-annihilation) produc'd these
Blossoms sweet

.....

The Blossoms of Eternal Life.

また *The Marriage of Heaven & Hell* 中の “Energy is the only life, and is from the Body; and Reason is the bound or outward circumference of Energy.” という語も、Blake が肉体の力を讚美したものとしてよく引用されるが、これも “Body” という語の通常の意味にまどわされた大きな誤解である。これは *Milton* 中の次の句と対照して考察することにより、その真意が明瞭になるであろう。

The Negation is the Spectre, the Reasoning power in Man:
This is a false Body, an Incrustation over my Immortal
Spirit, a Selfhood which must be put off and annihilated away.

—Milton, 42, 34-36.

Reason は “Energy” を取りまき制約するものであり (*Marriage*), “Immortal Spirit” を覆うものである (*Milton*) から, Energy と Immortal Spirit は本質的に同じものであることが判る。従って “Energy is the only life, and is from the Body.” の “Body” は, このような Energy の由来するものであるから, 勿論いわゆる肉体ではなく, “Eternal Life (Energy)” に満ち溢れる Spiritual Body であることは明白である。

既にのべたように, Blake の絵には抱擁する裸体の男女の姿がよく描かれているが, これも Whitman 同様, Blake も男女間の性を讃美したのだという誤解をひきおこす大きな原因となっている。このような誤解のために, Blake の思想が如何に歪曲されてきたか, まことに計り知れぬものがある。Blake は生涯理性の根本的特性である二元性のもつ虚妄性と, self-annihilation によるその滅却を強調したが, 次の例にみられるように男女両性はかかる理性の二元性を象徴しているのである。

The Twofold form Hermaphroditic and the Double-sexed,
The Female-male & the Male-female, self-deviding stood
Before him in their beauty & in cruelties of holiness (i.e. Reason).³⁾
—*Milton*, 21.

このような理性の二元性 (Male & Female) は, 靈魂が理性の無明性を脱却する世界 Beulah において, 始めて Eternal Life に甦えり, 輝かしい靈的生命に満ちた “男女” となる。

.....the vision of Beulah,
Where the Masculine & Feminine are nurs'd into Youth and Maiden
By the tears and smiles of Beulah's Daughters.....
—*Jerusalem*, 79, 74-77.

この Beulah およびそれと隣接する究極の世界 Innocence は, Marriage と Love の世界であり⁴⁾, ここで両性は互に抱擁し, 始めて完全に結合 (Marriage) する。*Jerusalem* の中に “the sweet regions of youth and virgin innocence” という句が見出されるが, *Songs of Innocence* の哲学的な詩 “The Voice of the Ancient Bard” の挿絵 (絵を中心としてその右方——“右” は Blake の絵では Innocence の世界を象徴する——に抱擁しあう若い

男女 - Youth & Maiden - が描かれている) は、この句の絵画的表現であると云って差支えない。 *The Marriage of Heaven & Hell* の扉の互に抱擁しあう男女の姿も、Innocence の世界の Marriage と Love を象徴するものであることは改めて述べるまでもない。“両性”間の完全な満足 (Gratified Desire) によってかかる Love は実現する。前掲の Rossetti Ms. の中の詩も、このような光のもとで再読するとき始めてその真意が明瞭になるであろう。このように、Blake においては男女の抱擁ないし結合は肉体的なものではなく、二元的なもの一切の究極的な統合を象徴しているのであって、この点の理解を欠くならば、彼の作品は甚だしく誤解ないし歪曲されてしまうと云っても過言ではない。

以上 Blake の肉体観を考察してきたが、改めて Whitman のそれを想起するとき、われわれは両者の間に根本的な相違があることを認めぬ訳にはいかない。Whitman にとっては現身の肉体そのものが生命と歓喜に満ちたものであり、神聖なものであり、靈魂とひとしいものであり、愛欲や情交も生命の永遠の輪廻に与るものとして少しも醜いものではなかった。彼にとって“性”は一切であり、すべては“ひっきよう男女の肉に帰する”(A compend of compends is the meat of man or woman.) のである。これに対し、Blake にとって現身の肉体は悪魔の所産であり、靈魂を閉塞する牢獄であり、棺桶であり、死すべきものであり、脱却すべきものであった。そして勿論性や情欲もこの例外ではなかったのである。

You become Mortal & Vegetable in Sexuality

-Milton, 35, 24.

We now behold the Ends of Beulah, & we now behold

Where Death Eternal is put off Eternally.

Assume the dark Satanic body in the Virgin's womb (i.e. the World of Innocence),

O Lamb divine (i.e. Christ) !

-Vala, Night VIII, 230-233.

What is Mortality but things relating to the Body which Dies? What is Immortality but the things relating to the Spirit which Lives

Eternally?..... What are the Pains of Hell but Ignorance, Bodily Lust, Idleness & devastation of the Spirit?

—*Jerusalem*, IV, To the Christians

(註)

- 1) a. No doubt I have died myself ten thousand times before. —*Song of Myself*, l. 1298.
b. We have thus far exhausted trillions of winters and summers,
There are trillions ahead, and trillions ahead of them./Births have brought us richness and variety./And other births will bring us richness and variety. —*Ibid*, ll. 1138-1141.
- 2) Blake's Poems, Introduction, xv-xvi (研究社)
- 3) cf. the Holy Reasoning power,/And in its Holiness is closed the Abomination of Desolation. —*Jerusalem*, 10, 15-16.
- 4) a. Good and Evil are here (i.e. the World of Innocence) both Good & the two Contraries Married.
b. The Sexual (i.e. Male-female) Death...../To freeze Love & Innocence into the gold & silver of the Merchant. —*Jerusalem*, 64, 22-23.